

1、はじめに

私は8月9日から8月22日にかけての2週間、オランダにあるUtrecht大学でのサマースクールに参加しました。イギリス国内のサマースクールに参加することが一般的ですが、言語学があまりメジャーな分野ではないこともあり、国内で参加できるサマースクールを見つける事ができませんでした。そのため、学校のチューターの先生やガーディアンと相談し、このサマースクールに参加することにいたしました。このサマースクール自体も本来は学部生以上向けなのですが、担当の方に確認をし、受け入れてもらうことができました。

1週目はPsycholinguisticsというコースを、2週目はIntroduction to Phonetics and Phonologyというコースを選びました。サマースクールを通して、そして初めて訪れたオランダで生活する中で、学んだことや考えたことについてこのレポートではまとめたいと思います。今後の財団生の参考になれば幸いです。

2、授業内容

(1)Psycholinguistics

1週目である8月10日（月）から14日（金）には、Psycholinguistics（心理言語学）についてのコースに参加しました。私は言語学の中でも言語習得や心理言語学に特に関心があり、非常に学びになる1週間でした。

First Language Acquisition（第一言語習得）やLanguage Production（言語産出）など、興味深い内容が続いていたのですが、特に印象に残っているのはLanguage Comprehension（言語理解）です。この中では言語学的情報が音、単語、文章の三つに大きく分けられ、どのような順番でそれらが処理されていくかについての説明を受けました。これまでも言語学について少し学んできてはいたものの、心理言語学という狭い分野で、これほどまでに多くのモデルや先行研究について学ぶ機会はなかったもので、非常に参考になりました。

また、コースの最終日にはグループプレゼンテーションを行いました。これは初日に3、4人でグループを組み、1週間をかけて準備をしたのち、最終日に心理言語学のトピックを扱った実験の提案を行うというものでした。私たちのグループではバイリンガルにおけるTip of the Tongue（ある単語が舌先まで出かかっているのに思い出せない状態）についての実験の発表を行いました。テーマ自体は私自身の関心とも非常に合っていて興味深かったのですが、被験者の条件や実際の実験手順など、より細かく詰めることができたなど、他のグループの発表を聞きながら感じる部分もありました。ただ、ほとんどの他の受講生が大学生以上だったこともあり、大学レベルの発表に触れる良い機会ともなりました。

Potential Outcomes

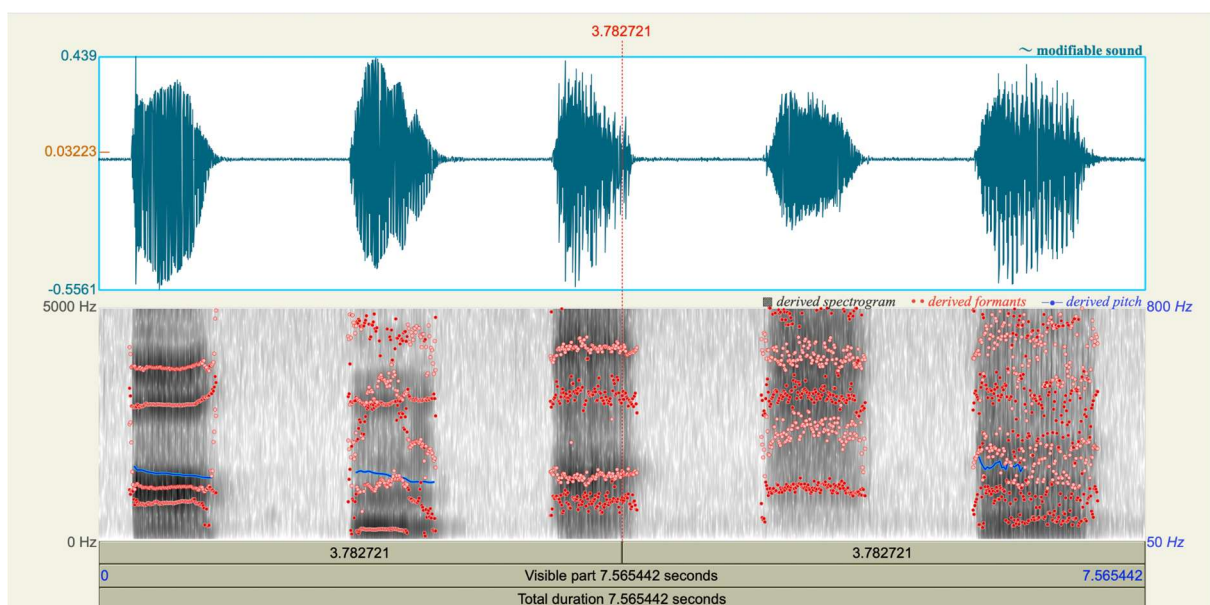
- L1 word retrieval will be slower with L2 translation than without L2 translation
->L2 translation causes a semantic confusion
- L1 word retrieval will be quicker with L2 translation than without L2 translation
->L2 translation works as a semantic clue

使用したスライドの一部。

(2) Introduction to Phonetics and Phonology

2週目である8月17日（月）から21日（金）には、Phonetics（音声学）とPhonology（音韻論）についてのコースに参加しました。このコースに参加する前は音に関する分野にあまり関心がなかったのですが、講義をしてくださった教授が素晴らしく、非常に有意義な時間となりました。自分の関心がある分野を少し決めつけていた部分もあり、もう少し言語学の色々な分野を幅広く見てみようと思うきっかけとなりました。

授業の中ではPhoneme（音素）の見分け方やStressの置き方のルールなど、PhoneticsとPhonologyに関して幅広く学びました。その中でも印象に残っているのは、最終日に扱われた、Stressの置き方を子どもがどのように学んでいるかについての研究です。この研究は実際に講義をしてくださった教授が発表されたもので、詳細に富んだ説明がなされており、非常に興味深いものでした。また、講義に参加する中で、同じ実験をバイリンガルを対象に行ったらどうなるんだろう、Universal Grammar（普遍文法）にはどのような裏付けがあるのだろう、など多くの疑問も生まれてきました。自らの言語学に関する知見を深めるきっかけとなるであろう問いに多く出会うことができ、有意義な時間となりました。



授業内で使用した音を分析するツール(Praat)の画像。

(3)運営について

サマースクールの授業自体は非常に濃密で、充実した2週間だったのですが、少しだけ注意事項を書いておこうと思います。このサマースクールに参加するにあたって、開催中止によるコースの変更のプロセスが不明瞭であったり、システムエラーによる意図していないキャンセルが発生していたりと、トラブルが多かったように感じます。英語のメールを多く書く機会に恵まれますので、ライティングを伸ばしたい、という方にはおすすめのサマースクールです。

3、言語

言語学に関心がある私にとって、オランダに行く際に一つの大きな楽しみであったのがオランダ語です。日常の中のオランダ語に触れる中で考えたことを書いておこうと思います。

まず、電車の車内放送や周りの人たちの会話を聞いていて最初に感じたことが、どこことなくフランス語とドイツ語の間のような発音に聞こえる、ということです。フランス語のように聞こえた理由は、おそらくrの特徴的な発音にあります。英語でのrは舌を丸めたような発音になる一方で、フランス語のrは、hの状態では喉をより締めて摩擦音のような発音になります（方言により異なるrの発音があるようです）。そして、このフランス語に似たrの発音の仕方がオランダ語にも見られました。

また、ドイツ語のように聞こえた理由は大きく分けて2つありました。一つ目はjの発音の仕方です。惜しくも写真を撮り損ねてしまったのですが、YouTubeを見ていた時に流れてきた広告で、jがyのように発音されていることに気がつきました。これはドイツ語の特徴の一つです。加えて、rがドイツ語のように巻き舌で発音されることもあるようです。これは日常会話の中ではあまり耳にしなかったように思うのですが、jの発音がyになっていることにリスニングのみで気づくとは考えづらいので、おそらく最初に感じたドイツ語のような発音はこのrの巻き舌だったと思われます。調べてみると、巻き舌（ドイツ語のような発音）と口蓋音（フランス語のような発音）はオランダ語では共に使われるようです。

そして、オランダ語の特徴の一つに長母音あげられます。長母音とは' door' の' oo' や

' tree' の' ee' のように、比較的長く発音される母音を指します。これらの例からも分かるように、英語では全く長母音が見られないということではありません。ただ、次の写真にもあるように、オランダ語には英語では不可能とされる長母音の綴りが存在します。



ユトレヒト駅にて。'Centraal' の'aa' は英語では見られない。

この長母音のルールをなんとなく考えてみよう、というのが私の中での一つのゴールでもありました。最初に立てた仮説は、長母音はapproximants（流音）の前にしか現れない、というものです。approximantsとは、英語ではrとlにあたります。centraalを始め、多くの単語で長母音がrとlの前に見られたことからこの仮説を立てました。ただ、別の子音の前にも特徴的な長母音がよく見られ、この仮説は正しくないようだという結論に至りました。



滞在中に訪れたデ・ハール城にて。長母音' ee' がnの前についていることが分かる。

次に立てた仮説は単語の最後の音節にのみ長母音が現れるというものです。音節というのはひとまとまりの音として認識されるまとまりのことで、俳句や短歌で一音として数える音という説明がわかりやすいかと思います。この仮説はかなりの単語に当てはまっていたのですが、上にあげた写真や次の写真でも例外を複数見つけてしまい、これも正しくなさそうだ、ということになりました。



同じくデ・ハール城にて。’Heerenveen’ と、長母音’ee’ が最初の音節と最後の音節に見られる。

その後も仮説を立てて、否定して、を繰り返していたのですが、なかなか特定の条件を見つける事ができず、どうやら長母音は他の母音と同じように扱われているようだ、という結論に私の中では至りました。それを明文化している論文を見つける事ができなかったのですが、もし誤りがありましたらご指摘いただけますと幸いです。

4、終わりに

参加前には複数のトラブルに見舞われ、一時はどうなることかと思いましたが、無事にサマースクールに参加してイギリスに帰ってくる事ができ、安心しています。非常に専門的で濃密な授業内容に加え、新しい言語に触れる機会もあり、充実した2週間となりました。

このような貴重な機会を支えてくださった田崎さん、財団の皆さま、本当にありがとうございます。この2週間を通して学んだことを活かして、今後の大学受験や言語学の学習に励んでいきたいと思います。